

主体的行為と人文地理学

デレク・グレゴリー

(大城直樹・潟山健一 訳)

Derek GREGORY

Human agency and human geography

Transactions, Institute of British Geographers New Series 6, 1981, pp.1-18.

© 1996 by Royal Geographical Society

摘要 本稿では、D.レイ Ley & M.サミュエルズ Samuels 編『ヒューマンスティックな地理学：見通しと問題』への寄稿者らによって提示されたヒューマンスティック地理学の見直しについて議論する。地理学におけるヒューマンイズムの伝統の復活は、部分的にはその刺激を、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュの人文地理学 *la géographie humaine* (ヒューマンな地理学) から得ており、この二つの着想=概念のあいだの結びつきを検討すれば、実践的生活の根源的「限定性 boundedness」のうちにある主体的行為の効力に関する共通した関心が明らかとなる。マルクス主義的人文主義の一連の並行的発展（とくに、E.P.トムソンの仕事）は常に、人間の主体的行為と構造の関係に関する科学的説明が、構造化の概念を展開することによって達成されることを示すものであった。しかしこれは、単一の概念システムのなかに「経済」と「文化」とを組み込み得るような決定概念を必要とするものであり、そして（ヴィダルの）ヒューマンな地理学という伝統的唯物論への批判的な回帰を予見するものでもあるのだ。

はじめに

『ヒューマンスティックな地理学：見通しと問題』¹⁾ という題のもと、デヴィッド・レイ David Ley とマーウィン・サミュエルズ Marwyn Samuels によって編集された論文集が出版された。この本は現代の地理学において復活したヒューマンイズムがいったいどの様なものであるかを見るのに丁度良い視点を提供するものである。「復活」とわざわざ書いたのは、ヒューマンイズムの立場に立つ諸批評の多くが、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ Vidal de la Blache を創始者とする伝統の流れに継続的に関わってきたことをあれやこれやと表明しているからであり、そして彼のヒューマンな地理学の法 *loi* ではなくとも、少なくともその精神 *esprit* を称賛してきたからである。いみじくもエムリス・ボーウェン Emrys Bowen は「仮に（近代地理学の背後に）哲学が存在するとすれば、それはポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュのそれである」と述べている²⁾。これらの結びつきについてはいくつか、本稿の前半で探求する。ただあらかじめ私は、彼らがいつも

確信をもって過激的な言い方をすること、つまり、レイが「人間のための中心的かつ能動的な役割」³⁾ と呼ぶものによって特徴づけられる地理学を実行しようとする際に、きまって歴史的根拠を持ち出してくることにとくに注意しておこうと思う。無論、そうした再構成のどれもが、ひたすら信仰主義的であるというわけではないし、ひとりバットィマー Buttimer だけが、それらが「諸世代にわたって受け継がれるべく理解されるよう」⁴⁾ ヒューマンな地理学への共感を新しく組織化していく必要があると認識しているわけでもない。にもかかわらず私には、これら全ての様々な再定式化の主旨が、確認しうる限りではロマンティックな復興運動となっており、トゥアン Tuan の綱領、すなわち「人間個人とはどの様な存在であって、一体何を為し得るのか」という事に関する拡張された見解⁵⁾ を支持するもののように見受けられるのである。ある意味でこの事態を例外的なものと言うことはできないだろう。事実それは、「新しい」地理学（*ニュー・ジオグラフィ*）が暴虐の限りを尽くしていた時期にはすっかり意気消沈していた主体的行為の創造的な次元の拡張であると同時に、

1950年代60年代の第一世代の機械論的な技術=術策の否定でもあるからである。レイ&サミュエルズが序言で説明しているように、「かつてはユートピア的な社会のプロメテウスの先驅をなすものでさえあった科学と技術の結束は、いまや人間自身の環境の消耗と略奪における中心的な患者として浮上し始めているし、かつては啓蒙的民主政治の顕著な特徴であった科学的合理性と政治(ポリチク)との結びつきは、さらに、より強力な独裁政治のための、巧妙なるがゆえに看破りにくい、主要なメカニズムとしてたち現れはじめてるのである」⁸⁾。

そういうわけでそれは、彼らの見解にあつては、当時優勢だった研究様式が知的栄養不足をもたらしただけ実践的な帰結となったのであり、「分析的手法や実証科学の自己限定的な拘束を越えたところに、人間の実存についての、より自覚的な、哲学的にしっかりとした、そして能動的な理解に対する新たな関心」⁹⁾を促すものとなったのである。だが、このことが近代批判理論の解放要求に呼応する一方で、そうした規範を問題視する意見も存在する。というのも、その約束事(プロトコル)が実際の研究のなかで翻訳されるとき、その批評が必然的に内含するネオ・ロマン主義的なヴィジョンは、この世界とのwith持続的な戦闘というよりも、しばしばこの世界からのfrom撤退を(あるいは、少なくとも、この世界「のof」静観を、またはこの世界「の」裝飾すらを)促しているかのように見受けられるからである。この兆候を見るにさしたる困難はない。まずは、すでにわかりきった作品意図のイメージを(わざわざ)見つけ出す出来合いのやり口(常套手段)としてフィクション作品を手当たり次第にあさり回ること、がある。これは、スタイナーSteinerがそれらに強い効果=影響effectivityを付与してしまう物質的な構造をてこでこじあけるようにして呼ぶところの「テキストの社会学、また我々とテキストとの関係の社会学」⁸⁾をまじめに認識することとは無縁である。つぎに、ありふれたものや見え透いたつまらないものに対する腹立たしげな審問。これは社会的な再生産と変質という、より広範なサークエンスのなかに社会的行為を位置づけようとする試みを全く欠いており、また、「経験」の自己正当化の力を確信するがために、理論的な努力ないしは考察の必要性に対しては盲目である⁹⁾。そして、文体形式や文学的実験への型通りの没頭。それは当世風タダイズムのぼろぼろで暴力的に

色づけられた喪服か、あるいは皇帝の仕立て屋によって美しく縫いとられ、入念にあつちえられた絹によって、なじみ深いその論議を着飾らせることにより、コミュニケーションを無効にしてしまうのである¹⁰⁾。しかし、これは途方もない皮肉である。というのも、ヒューマニスティックな企図の背後に確かに横たわっているはずの批判的意志は、(主として)社会学が社会史において人間生活の「限定性 boundedness」と私が呼ぼうとするものを認めるために、人間存在の実存的自由の称揚を、どうにかして越えようとする、一連の並行的な企図のスタート地点を成すものであるからである。そういうわけで、こうした試みは、ヒューマニスティックな地理学の「見通しと問題」が行為と構造の間の関係の理解のあたりでぐるぐるど堂々めぐりしていることを示唆するべく、この論評の第二部で利用される。この一対がオリジナルなヴィダル派の見通しに結合し得る限りにおいて、それが過去からのしわくちやの羊皮紙以上のものとなることを示してみたいと思うのである。

伝統・影響と反応

近代地理学において「可能論」がゆるやかに浮上し、しだいに明確化していくのは、世紀転換期のデュルケーム Durkheim とラッツェル Ratzel とヴィダル・ドゥ・ラブラーシュの遭遇にまで遡る。実際、ヴィダルはこの二人の主役のなかを取り持った。彼は社会形態学への地理学の還元というデュルケームのもくろみを、「人間が自然のゲームに参加している」こと、そして外的環境が「人間の活動のパートナーであっても、奴隸ではないこと」を主張して否定した。しかし社会が「宙ぶらりんになっている」わけではあるまい、とするラッツェルの信念を共有する一方で、彼は「自然が決して忠告者以上の存在ではない」こと、そして内的環境が人間を「能動的かつ同時に受動的である」ものとしてあらわにするものであることを強調し、なかなか廃れようとしぬ決定論に、手早く制限を加えたのである¹¹⁾。こうした仲介は二重の意味で重要である。なぜなら、ベルドゥレ Berdoulay が示してみせたように、ヴィダルのシェーマは、ラジカルな可能論にも、環境決定論にも向かうものではなく、むしろ本質的に、「自然的領野のメカニズムという現実によって拘束された人間の自由の組織化」に取り組んだ新カント派哲

学のそれであるからだ¹⁰。ヴィダル自身そう考えたように、我々は人間と自然を「決闘する二人の敵対者」として考えがちである。「しかしながら人間は（中略）生ける被造物の一部であり、もっとも積極的な共同制作者なのだ。彼は自然の上で、ただ自然を通じてのみ、自然によってのみ行動するのである」¹⁰。そして彼（ヴィダル）が、我々の再帰的な創造性として考える、パワフルな地理的な要因、そしてまた活発な人間的構成体の動因でもありえる生活様式という概念を通じて把握しようとしたものが、この、パッティマーが「対話」と呼ぶものなのである。つまり彼自身のもくろみでは、環境を人間化するなかで、人間は自身を人間化する¹⁰。かくして、ベルドゥレの言葉で言えば、生活様式は人間が「彼の環境へ自ら率先して創造的にふるまう適応」の場となるのである¹⁰。

こうした物言いはその後、地理学においてはジャン・ブリュヌヌ Jean Brunhesらによって、そして、歴史学においてはリュシアン・フェブル Lucien Febvreによって受け継がれていった。後者の方が私の当面の目的にとっては重要である。フェブルはこう記している。「選択せねばならない。みずからの環境の自然的諸力の作用に多少とも受身な、したがってみずからに働きかける測定可能な諸力に対する抵抗の程度を計って、反応を正確に定め、したがってその予測の可能な生物か。それとも、独自の活動を与えられて、新しい結果を創造し作り出すことの出来る生物か。この場合、語の真の意味で決定論の終焉がそこにあるのだ…、我々はそこでは単に近似値と蓋然性とを有しているに過ぎないのである。選択が行われるべきである。我々は一方では、数学的説明の見事な明快さと確実性の多くを失うが、その一方では…生活現象の精密な局面に適した、より豊かでより複雑な見解を手に入れるのである」¹⁰。そういうわけでフランス学派にとって、実践生活の日常的な活動は、限定された偶有性を示すものである。そしてそうした哲学は、競合するただの機械論的な主張に対して、この条件づけられた主体的行為 conditional agency という意味を保持しかつ擁護する、同様に流動的な方法論を必要とするのである。かくして、ルーカーマン Lukermann が認めるように、偶有性と蓋然性の計算は「フランス学派の」科学的基礎と「統制的な指針」とを提供したのであった¹⁰。

無論、この簡単な素描で示す以外の可能論も存在しうる¹⁰。それを概略することにより、生硬ではあるが

少なくとも地理学における現代のヒューマニズムの主な輪郭を明らかにすることにはなるだろう。ここで私は、可能論が環境決定論に対置され得るのと同じく、ヒューマニズムが、幾何学的な新しい決定論に対置されうるものであると主張しておくことにする。このことは、基礎的で普遍的な空間の計量と支配的かつ抽象的な空間論理の指図に、人々を受動的に応ぜしめる問題構制、すなわち、新=実証主義的な「社会の空間的組織化」とヒューマニストらの「空間の社会的組織化」との明白な対照によって最もたやすく風刺される二項対立をみることによって明らかにされる。ヒューマニストの地理学は、トゥアンが「既に決定されていて、時間性のない、整然とした世界」と呼ぶようなものとして景観を表象することを拒否し、そのかわりに、オルソン Olsson の見解によれば、確定性と曖昧さの間にずっと緊張関係が存在するような「人間の努力の貯蔵庫」とされるような、さきものとは並行する見通しを招来するのである¹⁰。この緊張関係は知的にまた実践的に、多くのヒューマニストの地理学の中で、特定の空間概念の社会的な構築・交渉・異議申し立てを通じて、明らかにされている。例えば、サミュエルズによれば、どんなシェーマであれ、その中に空間的な構造を組み入れることは、根本的な人間の行為としてあるのである。というのも、それが「唯一分離する能力をもって現れたという歴史的な生活形態をもって、人間の最小限度の定義を構成するからである」。この疎外化のプロセスから結果する実存的なジレンマは、隔たりを克服しあるいは除去していく人間の努力の経緯として理解されるところの「人間の歴史を通じて」再三再四と復活せられ、絶えず超克されていくのである。この様にサミュエルズは、「人間は必ず他の隔たりを生み出すのではあるが、それでもなお、いくつかのつながりを持ちながら、絶え間なくその隔たりを橋を架けるかあるいは埋め合わせるかの努力を払うのである」²⁰。

しかしながら、このことは反省なき知的探究 odyssey よりはましなものであるし、また例えば「空間」と「場所」の間の変転を解明しようとするトゥアンの試みは、社会的認知と空間的距離の間の本源的な互酬性を根拠としている。即ち、「我々が場所への愛着を自覚することが出来るのは、我々がそこから離れ、距離を置いて全体としてそれを見る=理解する see ことが出来る時だけである」²⁰。こうして生活世界の地

理は、「それぞれが人間の志向性・価値付け・記憶によって刻印された」「特定の停留点により強調される一種の位相面」そして、既存する定型化のシステムの作動と再確認、あるいは新しいシステムの出現と再編入に符合する周期的なリズムと突然の混乱によって活性化される全体といった、我々の様々な相互作用に浮かび上がるものとして描定される²⁹。結果として、これら多くの初期ヒューマニストらの目論見は、実存的なものや情緒的なものに関係しており、その主要な対象は、「人間の利害関係と掛かり合いという非幾何学的空間」であった³⁰。

これはしかし最近エントリキン *Entrikin* が気付いたように、甚だしく制限されたものである。完全にヒューマニスティックな地理学はしかし、多くある中の一つの社会的様態として、きっと幾何学的な空間概念を含んでいるはずである。彼の見解によれば、カッシーラー *Cassirer* の新カント学派的哲学は、入念に彫琢された空間概念が、あらゆる人間経験の特色として存在する仕方を明らかにする手段を提供するものである。——しかし、再言すると、それは本来的に拘束=限定されたものであって、そうである以上間違いなく、空間に関する諸概念を純粋に主観主義的に自由にイメージすることなどできないのである³⁰。ザック *Sack* も同じ問題を論じている。「洗練された=断片化した」思考様式と「洗練されてない=融合した」思考様式における空間概念に対する彼の綿密な組み立てによる区分を認めれば、ヒューマニスティックな見通しはさらに一層拡張されることだろう。はじめの組み合わせは、「ある程度概念的には主観と客観、空間と実体が、切り離されているもの、…(ときに)それらの総合 *synthesis* を達成する努力を行うもの」と認識するものである³¹。しかし、その再結合は部分的なものに終わり、そこから流れ来たった空間概念は、特質上特殊限定的なものとなる。かくして「自然科学は幾何学的空間によって空間を理解し、社会科学は部分的にはこの概念を共有するものの、特定の場所や認知的・知覚的空間というかたちで感情と知覚を採り入れることで空間を他のものに替え、芸術は空間の仮象と仮想空間における形態を創り出す」などと区別することが可能となるのである。対照的に二番目の組み合わせは、概念的には殆ど切り離されていない。仮に分離が認められるとしても、抽象度の低い水準で行われているに過ぎない。ここにおいて、子どもの空間観と「日常、経験

している」空間観と、呪術的な空間観が区別されるものとなる³²。これらを区分することで、分類以上のものを意図しているわけであるが、これは極めて重要である。というのも、それによってそれらに明確な物的相互関係を持たせるようにするからである。「分析を抜けよう」と試み、また可能な限り明確に空間諸概念の広がりとしてそれら相互の結びつきを規定しようとすることは、本質的なことであって、それらが景観に対する人間の振る舞いへと向けられるものとザックは考えるのである³⁰。(宣伝行為的 *gestural* なことばとして以外に) これら相互の結びつきが殆ど知られることがなかったために、初期のヒューマニストらの企図の領域の限定性が問題とされることはなかった。確かにトゥアンは、ザックの綿密な組み立てと大まかには一致するような、経験的な事例の一連の注意深い調査を行ってはいる。だが彼は、これまで、それらを一緒に突き合わせ、かつそれらの本質的な要素や関係をあきらかにすることをなし得ない³²。その一方で、ザックの企図で特に重要なことは、それが、どのような社会形態のなかでも共=存出来る象徴的構造として、こうした多様な空間概念をあらわしているということである。つまり、それらはあらゆる人間の思考にとって本来的に備わっているものであり、「人間の知性の潜在的可能性」を再現=表象するものなのである。こうした物言いはモダンな構造主義の仮定と主張への還元を招来しうるが、しかしレヴィ=ストロース *Lévi-Strauss* と違って、ザックはこれらの空間諸概念の組み合わせが歴史的に限定=拘束されているものとして研究を行っているし、また「いかにして社会=経済的な構造が、思考様式の分離の進展・接合・程度に影響を与えているのか」を考察しようとしているのである³³。これらの案をここで展開することは出来ないが、それらが、「ある着想 *idea* によって、すなわち改変を促すべく自らの環境から彼らが作り上げてきた着想によって自然決定論の専制的な力から」逃れようとする、集団の偶有的な能力をヴィダグル派が強調していることと結びつけることが出来ると私は考える³³。

要約しよう(図1参照)。ここで明らかにしておかねばならないことは、地理学におけるヒューマニストの伝統が、暗黙のうちにまま想定される決定に関する自由度を、単純かつネオ・ロマン主義的に促進するものである必要はないということ、それどころか逆に、その変異体のひとつひとつが(少なくとも部分的に

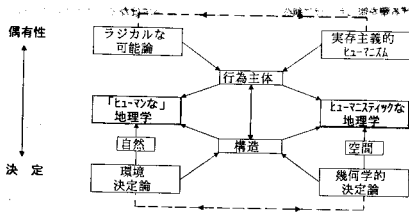


図1 ヒューマンな地理学とヒューマンスティックな地理学

は) 敵対する主張の強さを認識しているのだということである。丁度ヒューマンスティック地理学がその中心に「空間」をすえ続けているように、(ヴィダル派の) ヒューマンな地理学は、「自然」を人間の歴史の中心にすえていた。しかしこのどちらを保持することも、ヒューマニストの伝統において実践的生活の本質的かつ限定的な偶有性として考えられているものが要請する主体的行為という言語への翻訳によって影響を受ける。そしてこの「限定性」は、周知のとおり明らかに科学的な語彙目録から引っぱり出してきた語の(いわば)「偶有性のマトリクス」を、大まかには規定し得る構造という概念=着想を通して認められるのである。

しかし、我々は未だ多くの問題を未解決のまま残している。つぎの章では、社会学と社会史がそれらに対してどのような解決を(部分的にであれ)並行して行ったか。それを考察してみることで、関心の焦点にそれらを持ちこんでみようと思う。その際に、私は特に広く「マルクス主義的ヒューマニズム」と呼ばれるものの一連の展開に注意を払うつもりである。それらの成果と主張が、二、三の注意するに値する例外はあるものの、『ヒューマンスティックな地理学』に寄稿された諸論文の中には著しく欠けているからである。私はこの遺漏を戦略的な欠失と考える。なぜなら、それらを一括にとりあげることで、人文的と称するにふさわしいものであればどんな地理学であれ、きっとその核心に位置を占めているはずの主体的行為と構造的な変形の間関係が明らかにされるはずと思うからである。こういうのも、私は今だに、どんな地理学であ

ろうと、人間が自らの人文的地理の集合的な改変に参加できるような世界を回復させるものでなければならず、歴史に対する適切な理解無くして、創造性と偶有性と変化とに真に取り組むことはきっと出来ないと考ええるからである³⁰。

並行: 調和と不一致

E.P.トムソン Thompson はかつて「歴史的な意識は、変容の可能性や人々の内にある可能性に対する理解を、きっと助けてくれるはずだ」と述べたが、それゆえに歴史地理学とヒューマンスティック地理学間の「注目すべき取束」というコール・ハリス Cole Harris の認識を読み解くことは意義深いのである³¹。実際、彼による「歴史的精神 historical mind」の繊細な呼び起こしは、トムソンの「歴史的論理」の情熱的な賞揚と著しく似ている。ために、この二つを比較することは、こうした並行する伝統を問うていくための格好のスタート地点となり得るのである³²。

歴史家の領域に「科学」的理論体系が侵入してくることに、二人とも限りなく懐疑的である。ハリスにとって歴史的精神とは「コンテクスチュアルなものであって、法則を発見したり「法則を適用したりする」ものではない。また彼は「人間生活の一般的パターンを説明する包括的な諸法則が存在するということ」に、相変わらず納得しない。一方トムソンは、「物理学のものと同じ基準のなかに」歴史的な素材を持ち込もうとする連中、そしていくつかの「ア・プリオリな精神的図式化」のテンプレートに合うように過去の

パターンをねじ曲げる輩を腹立たしげに糾弾している。歴史とは複雑な経験的領野である。ハリスは、歴史学が「当初は意味をもたなかったもの」を「理解可能なもの」にすることであれば、歴史家は、自閉的な理論至上主義に閉じこもってしまうよりも、むしろ「あるがままの生に対してオープン」でありつづけるべきであると主張する。トムスンのいう歴史家もまた、つねに「耳を傾け listening」つづけている。そうして彼は、ゆっくりながらも、過去の響き resonances を聞けるように、そして最終的には理解出来るようになり、また、とぎれとぎれの微かな音の中からリズムと抑揚とを識別することが出来るようになるのである³⁰。しかし、たとえそうではあっても、過去に演じられた終わることのないパフォーマンスを現在に甦らす可能性を秘めた、何がしかの書き記されたスコアをもってしても、その残骸をもと通りにすることは、歴史家には決してできないのである。なぜなら、どんな安定性や確実性をも打ち砕いてしまう二重の解釈学と、彼は戦わねばならないからである。この様に述べることで、つまるどころ私は、第一に、我々が「歴史」と呼んでいるところのものが、過去の意味と現在の意味を相互に取りつなげることによってしみ出してくる主観性に救い難く浸された一つの再構成であると言いたいのである³⁰。ハリスがそう考えるように、歴史家とは「単なる空の器ではなく、その判断に否応なしに影響を与える過去についての研究に特別な見解をもたらす」人間存在なのである。彼はさらに続ける。「化学の実験にマルクス主義もカトリックもありはしない。共通の実験手続きが、異なった実験室でも同じ結果を生み出すのであり、同じ法則に適用された同じ初期状態が同じ演繹推理を生み出すのである。立証された結果が全面に出てくるにつれて、科学者はそれぞれに実験室へとももるようになる。そうではあるまい。我々がここで討議している精神の習性については（幾人かの）19世紀ドイツの歴史家たちがさまざまなかたちで決着をつけてきたにもかかわらずである」³⁰。また同様にトムスンもこう記している。「『歴史』は実験的立証のための実験室などを与えてくれない」。これはある意味でハリスが言及したような不断の批判的判断を下していくことが歴史家の専門的「義務」だからである。彼は言う、「我々の賛否表示は何ものをも変えはしまい。しかし別の意味では、あらゆるものを変えてしまう可能性をも秘めているのである。というも、我々は、それら

の別の価値ではなく、こちら側の価値がこの歴史を我々にとって意味あるものとするのであり、またこれらこそがわれわれが自身の現在の世界の中で拡張し持続させようともくろむ価値である」などといっているからに他ならない。うまくすれば、我々は歴史を遡り、それを我々自身の意味に賦与することだろう。言うなれば我々はスウィフト Swift と手を握ることになるのである³⁰。こうしたカップリングは、それらの拮抗と仲裁とが「証拠物件が審問の席のように従順でいるわけではなく、時間の媒介によって我々の目の前で動く」ものであることを意味する以上、つねに暫定的なものであるに違いない。ハリスが言うように「過去からのデータは静的なものでもその解釈から切り離されたものでもないのである」³⁰。だが、次の段階で、我々はさらにこの「歴史」は、「再 re」構築される前に「組み con」立てられたものであること、つまりは歴史的な出来事の生起それ自体が非常に変わりやすいものであるために、歴史家は「つねに運動状態にある諸現象に適合するよう、様々な異なった論理を必要とするほどであるということ」を認識しなければならない。「特定の証拠=証言は、特定のコンテキストの中でしか描写=説明を見いだすことが出来ないし、またその分析の一般的な用語が一定することはまず無く、たいいは歴史的な出来事の動きに沿って変転している矛盾した現れとなって出てくるものである」。そしてこうした永久に行われる再=方向付けや再=定義付けの理由について、トムスは「偶有性が、社会的経済的過程の『諸法則』（あるいは、論理とか圧力と称したいところだが）を、実験科学におけるの様な法則をも無効にしてしまう様な方法でつきからつきへと打ち砕いてしまうからだ」と主張する³⁰。物理学者や化学者と違って、歴史家があらかじめ解釈されている世界を扱わねばならないということは、単純なことではない。それどころか、これらの解釈にはそれら自体の有効性が存する。手短かに言うと、歴史はあらかじめ確定されたものではなく、主体的行為が歴史というプロセスから立ち退かされることなどありえないのである。

幾度となく繰り返される実験科学と歴史学の間、より一般的な言い方をすれば、科学と人文科学の間、こうした対立の多くは、この対立自体それらが誤ったものであるということと同じくらいよく知られているところである。いかなる厳格な知的探求であろうと、その本質的主観性は認めなければならない（さらにいえ

ば、認めている)し、自然科学と人文学は双方とも世界の偶有的で不断の動きを扱わなければならない。さらに、理論について語られた言語にいかなる特権をも与え得ぬと、またトムスンが言うように「歴史について知るために必要なことが、概念構成専用の工具を使って作り上げられるものばかりである[はずもなく]」、ヒューマニスティックな企図がハリスの恐れるような「社会学」における抽象的な実習課題になるものではないのであれば⁴⁰、観察について語られた言語にどのような特権が付与されることにも同意できないということもまた確固たる事実である。探求に対するきちんとした解釈学的概念は必然的にこの二者間の完全な反省的 reflexive な関係の認識を伴うだろう。トムスンとハリスの二人は数多くの著作のなかで、このために必要な創造的な努力を明白にときに爽快なまでに立証して見せている。無論こうなると我々の研究成果は暫定的なものとなるに違いない。しかし例外など無い。これは近代科学のありふれた言いぐさである⁴⁰。真の問題、そして最も本質的な対立とは、おおよそトムスンが認めているように、「社会過程に関するある種のモデルを見出すことにある。このモデルとは最終的な分析にあってはつねに社会的存在によって決定されるコンテクストのなかで、社会的意識の自立をうながすもの」である。かくして、彼は問う、「一体どの様なモデルが、望まれたものでも偶発的なものでもなく、(不随意的運動法則によって決定されているという意味で)法則化 lawed されたものでも(社会的過程における論理を誰にでも観察することが出来るという意味で)不合理なものでもないようなかたちで歴史が登場するような厳然たる人間の弁証法を包含し得るのだろうか」⁴¹。わたしが指摘しておきたいのは、まさしくこの問題こそ、ヒューマニスティック地理学が答えていかねばならないものだということである。

おそらく部分的には、その解決策はスタイルに関わっており、はじめの方で私が批判した文学的実験さえも必要とするようなものであろう。それゆえにこそオルソンは、なんとかして「内と外、主体と客体、心と身体の間にある明暗濃淡の境目を壊すことなく屈曲しかつ移動するその音のダンスのリズムに敏感であるような」言葉の網の目を編み合わせることを学ぶよう我々をせき立てるのである⁴²。また確かにトゥアンがサルトル Sartre から召還してきた「ひとつの文のなかに四つの命題」を書くことを試みるときのいらだたし

い気持ちを私は認めることが出来るし、またそれについてのはたびたび共有している。というのも、彼自身記しているように、「複雑で不明瞭な諸関係をそれらが同時に存在しているように描くためには、繊細で示唆に富む言語を要するからである」⁴³。しかし私は、言語の創造的な次元がヒューマニスティックな伝統…スタイナーがかつて述べたように、それなしでは我々は「永久に現在の単調な繰り返しを」続ける…の内で探求を声高に求めるのを認めるのに音かではない一方で⁴⁴、私にはこれらの実験の多くは、成功からはほど遠いように見受けられるのである。無論それらが重要でないと言っているわけではないが、それらの現実的価値は、思うに、なお多くの音のねじれや意味の衝突という苦闘の結果というより、むしろそれらの失敗が容認されるという点にある。それにまた、近代地理学においてももっとも無視されてきた二つの技能=わざは読むことと書くことであると考えてよかろう(と私は思うのだが)。ヴィダル派的伝統の失墜がどのくらいこのことに帰するのか、なかにはこれを明言する者もいるけれど、私には言えない。がしかし、我々自身の努力の多くがいかに貧弱でわざとらしいものであるかを実感したいのであれば、例えば『イングランド労働者階級の形成』といった本を参照しさえすればよいといことは知っている。その本でトムスンは人間の歴史の捉えどころのない、暗示の多いつらなりを厳密に映し出し、類希な感受性と偉大な情熱を持って書き記しているのである。彼は、歴史家たちの見せかけの客観性を、自身の再構成にあてがうことはない。形容詞や副詞を極力削った面白味のない文章が、偶有性と確定性の間の感覚の渦から排出された過去を陳列してゆく⁴⁵。

しかしトムスンは何らかのより高尚な美意識のために古めかしい記録に光を当てる能書家などではない。彼の企図のすべては明確な政治的掛かり合いの中から立ち現れ、そして明確な政治的帰結を必然的に内包するものである。それらは、発展し続ける諸概念の体系によって形成され、またそれを通じて持続しているのである。これがその複雑な歴史の跡をたどる場所でないことははっきりしている。ここには明らかにグラムシ Gramsci のヒューマニズムの特徴と…とりわけ、プラクシスとヘゲモニー概念の同化において…通じるものが多くあるし、そしてまた、レイモンド・ウィリアムズ Raymond Williams との終生に亘る交際にも

多くを負っている⁴⁶。しかしながら同時に(トムソンは当然このことの重要性を主張するのであるが)、それは実践型の working 歴史家としての彼の経験から立ち上ってくるのである。このことは以下に続く議論を通して記憶しておく必要がある。なぜなら、トムソンの物語の流れを死産のイメージの連続へと還元するもつとも安易な方法が、それを経験という道筋から離れて評価することであるのだから。彼が歴史について書いているのであれ歴史を書いているのであれ、少なくとも彼の概念体系はつねに相互に関連した中心となる2つの関心事…即ち、人間の主体的行為と社会構造の関係および経済と文化の関係…を有している。

もしこれらの2つの対がトムソンの問題構制上の相等しい軸を形作るのであれば、一番目のものが、おそらく相等しいものなかでの一位のものとなろう。それは即ち彼が自身、「一方で歴史的決定論がまき散らす諸問題への、他方では、主体的行為と道徳的選択と個人的責任から派生する問題への」基本的な関心と見定められているものである⁴⁷。これらは共通の起源を「歴史的な出来事の生起作用 eventuation の規則によって統制された相互連関構造」のなかに持つ。即ち、「社会(そして「社会」それ自身が架空の境界の内部で人間を描き出す概念であり、共通の規則によって動かされるものである)は、非常に複雑な「ゲーム」として考えられるかもしれない。時としてそれはその性質に関わる非常に物質的な証拠物件(競技場、ゴール、チーム)を提供し、時に、目に見える規則(法律や組織の規則集)によって支配され、また時には、選手たちが余りにもよく知っているために決していちいち口にすることはないが、観客には間違いなく推測がつくであろう目に見えない規則によって支配されているのである…。生活全体は、あれやこれや禁じたり、特別な象徴的意義を与えたりするこうした目に見える規則と見えない規則の「構造」のなかで進んでいく…。

ゲームの規則が解釈されたり推理されれば、我々はそこでそれぞれの選手に役割ないしは役目を与えることが出来る。選手は(こうした規則によって)ゲームの担体として存在し、その構造内における一要素…ハーフ・バックやゴール・キーパー…として存在する。まさしくこの意味で、「労働者」とは生産諸関係の担い手 bearer であるといえるのである。いやそれに留まらず、我々はすでに、女性をも何者かに付き従う「第2ヴァイオリン奏者」ではなく「労働者」と称して、

同じように規定している。しかし更なるアナロジーを行わなければなるまい。ゴール・キーパーがゲームに組み込まれている being gamed などと言い続けるわけではないのだから…⁴⁸。

無論、このアナロジーはお馴染みのものであって、人文地理学者の多くはこれを容認するだろう⁴⁹。他のいかなるアナロジーとも同様に、そこには欠点があるのだし、あまりつきつめてはなるまい。例えばアンダーソン Anderson は、「尺度の大きな、つまり長期的な諸過程に対する一般的なアナロジーとしてこれを用いることはできない。ここで言う諸過程とは、意識的に学習された諸体系ではなく、たとえ例外的にそうなるにしても、諸規則の内ではなく、諸規則について論じ合われるものである」と述べたが、トムソンはよくこれに気付いており、彼の(例えば)『ホイッグ党员と狩猟者達』のすぐれた終結部は、交渉と争論の重要性を十分に認識するものである。確かにこのアナロジーは「全ての点で」失敗に終わるという訳ではない。なぜなら、アンダーソンの言うように、トムソンの意図は「こうした諸規則の中で、選手たちが創造的な主体的行為者として互いに対立し合う」のであれば、おそらくその争い合いが、意識的にあるいは無意識的に、彼らの登場する領域を再確定ないしは再形成し得る、というところにあるからだ⁵⁰。にもかかわらず、より一貫した理論的な解釈がもたらさるうなら、(このことがこうした解釈=言い換えの唯一の理由というわけではないが)誤った理解と誤った解釈というリスクを減じることになるかもしれない。ここでわたしは、明確にトムソンの企図と一致するアンダーソンの「歴史的決定の諸形態の根本的二重性」の主張に対して原則的には適用することのできる構造化の理論が存在することを示してみたい⁵¹。

構造化理論は幾分かフランスの社会理論、とくにブルデュー Bourdieu とトゥレーヌ Toulaine に、また同様にハーバーマス Habermas が繰らせた批判理論に帰するところがあるが、私は主としてギデンス Giddens のものを使ってみたい。というのも、それがまぎれもなく綿密に分析して組み立てられたものであり、なおかつ十分によく展開されているからである。ギデンスのスキーマの中心にある定理は「構造の二重性」であって、それは社会生活が本質的に「再帰性」を示すものであると主張するものである。これによって彼は、(相互作用のシステムを通じて)社会的生活

を再生産する中で、意味作用、支配、正当化といった諸構造が既に存在することによって入手可能となる、解釈のための図式、資源、規範を、行為者が慣習的に用いること、そしてそうすることで、彼らがこのような諸構造を直接また必然的に再構成するということを示そうとするのである。要するに、「社会システムの構造的特性は、それらのシステムを構成する実践の媒体でもありまた結果でもある」というわけである(図2)⁵⁸。ブルデューは「客観的構造はそれ自体歴史的实践の産物であり、結果的に再生産に貢献するその生産原理がそれ自体、構造の産物である歴史的实践によって不断に再生産され変形されているのだ」と言っているが、殆どこれと同じことを言っているのである⁵⁹。この種の特徴づけで重要なのは、彼らが区別するシステムと構造よりは(明らかに議論の余地が多くあるのだが)、むしろそれらの様々な様態を引き出している中で、その中に巻き込まれている行為者がそれらの知識を言葉で表わすことができようできまいと、実践的生活のある程度の「貫通=浸透性」を示していること、そして結果的に構造は行為に対する制約でも障壁でもなく、むしろ本質的にその再生産に巻き込まれているものであるということに認識することなのである⁶⁰。

私はここにこそ大いなる前進があり得ると見る。「ヒューマニスティックな地理学」の編者、レイとサミュエルズはその序文のなかで、ウェーバーWeberよりもむしろデュルケームの方が長い間、多くの人文地理学にとつての(インプリシットな)モデルであったことに注意しているが、近年では、しかし彼らも認めているように、志向行為の効力を復権 reinstated (私が言うなら誇張 overstated) させる主意主義的な批判への直接的な反応として、一部では、こうした行為と構造の関係の物象化されたヴィジョンからの離脱が試みられているのである。目的-結果は、弁証法的再生産の形式と私が呼ぼうとするものの漸進的な出現および結合として存在している。その中では「現実、主体に、時として見られることなく自明化され」、その結果「(自らに)振りかかる束縛の全体像に気付かないこともありえるというような仕方でも作用し返す社会的構築物」として存在してきた⁶¹。詳しく述べれば、レイは「構造的現実と、現実を構築しようとする人間の企てとの弁証法的関係」を説明しようとする総合を構築しており、ダンカン Duncan はこれに「人間が抽象化された

世界…つまり、理念・価値・行為規範…と、それが彼自身の手になる生産物であるにもかかわらず、客観的で一定不変の便宜 facilities として彼を支配させたままにしておく現実の具体的客体の両方を生産する」仕方を痛烈に暴きながら、議論を実質的に深めていく⁶²。この最新のスキーマは、そのあらゆる翻案も含めて、全体的にパーガーBergerとラックマン Luckmann の相互作用論から(上で用いた語法のいくつかは実際、彼らのものである)またシュッツ Schutz の構成的現象学から、しばしば借用されてくる。しかしそれは、伝統的社会理論の古くからの対立の大きい示唆に富む統合を提示する様に見えるようであり、実際にはその機械論的な決定論と主意主義的な概念論の限界を克服し得てはいない。それどころか、バスカーBhasker が主張するように、それらを結合し混ぜ合わせ、また、先に論じたように、ヒューマニストの企図にとって極めて重要な、本当の変化の概念、またそれゆえ本当の歴史の概念を担うことが出来ていないのである(表1参照)⁶³。

トムソンの二番目の対(経済と文化)も同様に、通常は対置させられたり、別のものに還元されたりする諸要素を切り離し、また再び結び合わせる。ありがちな対置の典型として、サーリンズ Sahlins の人類学的批判を取りあげることが出来る。彼は二つの基本的な「パラダイム」をつぎのように区別する。即ち…「文化秩序を、人間の現実的な意図的、実践的な行動のコード化されたものと考えべきか、それとも反対に、世界のなかでの人間の行動を、文化の意匠——実践的经验や慣行をも、また両者の家系をもひとしく秩序づけるもの——に媒介されていると、理解すべきか、というふうに。この区別はくだらぬことではなく、また答えは両者のどこか中間にあるとか、いずれの側にもある(つまり弁証法的である)といった、まったく便利な机上の空論にも解消されない。というのも、沈黙と雄弁とのあいだでは、真の対話はありえないからである。一方の側は、『人間の意志から独立した』自然法則や自然力があるとして、押しだまってしまう、他方の側は、人間の集団が、自分自身や世界についてあたえる多種多様の意味について、喋喋する。だからこの対立には妥協などありえない(邦訳 72-73頁)。

また、察せられるように、サーリンズが「それぞれの生活様式にそれを特徴づける性状を与えるような、文化の決定的な特質について、この文化が物質的な制

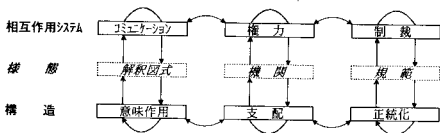


図2 ギデンズによる構造化理論

表1 行為と構造：歴史的变化の4つのモデル

- I 物象化：デュルケムの社会理論とネオマルクス主義的な定式化が典型
社会は独立した現実であって、人間の主体的行為に対して外在的で制約的である



- II 主意主義：ウェーバーの社会理論が典型
社会は意図的行為によって構成されている



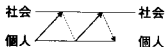
- III 弁証法的再生産：バーガーの社会理論が典型

社会は不断の弁証法において社会を創りだす諸個人を形成する；社会は人間の外在化であり、人間は意識をもった社会の充当物である



- IV 構造化：ハーバーマースやギデンズの世界理論が典型

社会システムはそのシステムを構成する実践の媒体でありながら結果でもある；両者は分離と再結合を繰り返す



約に従わなければならないということではなしに、文化が、決してただひとつの可能性とはなり得ない特定の象徴的なスキーマに従ってそうなる」と認識しているのは明白である。「ゆえに、有用性 utility を構成するもの、それが文化なのである」⁹⁸。ある意味で、トムソンはこの創造的なものと感情的なものを足踏する点で一脉通じていると言えよう。実際幾人かの批判者にとって、彼の企図 project は、経済が主体的経験の範疇を通してのみ現前するような「文化主義 culturalism」であり、また古典的マルクス主義を頑固なまでに転倒させることにおいて、トムソンはあたかも「上部」による還元を遂げようとするものと思われる⁹⁹。

確かにトムソンには、実践型の歴史家にとって古典的モデルが「役に立たない営み」であると論じる覚悟ができています。その政治的またイデオロギー的上部構造に對置せられる経済的基盤の定式化は、「嘆かわしいイメージ」であると彼は言う。その理由のひとつは（既に示したように）「およそ人間の実存のプロセスとは、それが建築工学の教科書に於てくるメタファーのなかに内含されるときには、収縮され、奇形化されているに違いないから」であり、また別の点から言うと、「経済的論理と道徳的論理とがともに存在しているからである。但し、このいずれに優先権をあたえるかということ論じるのは無駄である。なぜなら両者とも『人間関係の中核』という同じ物を別の表現に置き換えているだけなのだから」⁹⁹。実際トムソンは、少なくとも古典的マルクス主義の用法において、あるいは（とりわけ）のちに還元主義を招来するような、比較的新しい構造主義的マルクス主義の定式においてさえも、決定（訳注参照*）という概念と関わることは

ないだろう。彼はアナログ的な「ゲーム」に立ち戻って、自らの論拠を詳細に述べる。「マルクスの最もすばらしい業績は、人間関係が、貨幣すなわち資本によって媒介されるような規則の、ほんのわずかしか目には見えない構造だけを推断…「読解」…「解釈」…したことである。彼は、百年後の我々であればもっと簡単に読みとることの出来る…ないしは読みとれることになっている…目に見えない諸規則をこれ以外にもしばしば垣間み、そして時には把握していた。（私の見解では）他にも彼の見出した重要な象徴的・規範的諸規則が存在する。これらのうちいくつかは、彼の時代の知識層が思い及ぶものではなかったし、またそうした諸規則について、『政治経済学（19世紀の経済学）』は何の用語も持ちあわせてはいなかったのである」¹⁰⁰。かくして、もし我々が「社会的・文化的現象が経済的なものあとをある程度の距離を置きながら追っているわけではない」こと、そして「それらがおおもとは、関係という網の目のなかに等しく沈み込んでいる」ことをつねに覚えておかねばならないのであれば、同時に我々は分析上の分離を行って、それらを「個々の資質を持った形式」として検討しなければならぬのである。トムソンは、そのためには「政治経済学の前提のなかに内含されることのない、新たな用語の集成」が必要であると確信している。政治経済学は…「社会と歴史とを我々が理解しようとする際、直ちに不可欠となる用語を何れ持ち合わせてはいない…言い換えれば分析科学的な目的のために、それらの用語を入念に排除してきたのだ。政治経済学の用語とえば、利用価値に関するもの、交換価値に関するもの、貨幣価値に関するもの、そして剰余価値に関するものであって、規範的価値に関するものではない。気づき得るその他の領域についても何の用語も持ちあわせてはいない…。ある一つの「語彙」が他のものの中に「再現」するという仮説を設けることは出来るが、それが如何様にして、どの様な手段ないしは媒

*【訳注】この「決定」determination 概念は、アルチュセールによるものである。ただしアルチュセールの決定概念は、むしろ「重層的決定」として理解されるべきであって、本稿の論旨ではその点が十分に押さえられてはいない。そのため経済的審議を一義的とする教条主義的な決定論的試みのみが、まさにアルチュセールにおいて試みられたという事実への評価が適切に与えられていないうらみがある。なお本稿の所論への Ley のコメント (Rediscovering man's place) とそれに対する Gregory の返答 (A realist: construction of the social) が次号 (J.L.B.G. n.s. 7, 1982) に掲載されている。野澤によるその紹介（「地理学における行為と構造」：D.レイとD.グレゴリーの論争を通じて、地理 38-5, 1993）も併せてぜひ参照されたい。

<参考> 重層的決定 surdétermination / 多元的決定とも言われる。元来は、精神分析の用語で、複数の原因が折り重なって一つの出来事を形成することを言う。アルチュセールは社会構造の分析に、この概念を導入する。構造はつねに重層的に決定されており、単一の原因に還元できない。構造の諸契機は対立、矛盾、ずれを含んで、多様な可能性をつくりだす。（今村仁司『社会学事典』弘文堂、1988より）

介を経て現れるのかは、いまだに知られていないのである⁶⁴。

この核心をついた一例が、ここで何が問題なのかということを見事に明かしているであろう。かく言う私には、自分の論考が示唆し得るよりはるかに込み入ったもので、また異論をさしはさまれかねないような問題を描写することすらままならない。「経済地理学の人間化された概念」へと向かう挑戦的な試論において、ウォーレス Wallace は、とりわけ古典的政治経済学に取り付いた「合理的経済人」の亡霊が、現代の批判家が唱えるような非=歴史的、非=文化的な抽象化ではないことを示した。ウォーレスは、この概念が「効用の限界までの最大化を保證する方法論的装置」以上のものであり、それがまた、まさに工業化前の資本制社会において未だかなりの力をもっていたカルヴァン派神学の世俗化に他ならないと主張する。「合理的経済人」はかようにしてそれすなわち理論的かつ経験的な表記であったし、またそれ自体、ギデンズなら、意味深く合法的で、権力をふるえるようなものと評するであろうような、強固で、歴史的に特定可能な構造的システムと結びついている。実のところ、それは、政治経済学の言語にピューリタニズムの文化的語彙目錄を組み込んだものだったのである⁶⁵。

この例で特に重要なことは、それが、見かけ上は純粋に経済学的な概念であると思いきもの、そして今や我々にはトムソンの作り出した「結合語」の一つとして同定することの出来るものから、あらゆる方向に広がっていく複雑な接続網を指し示しているということである。トムソンは『ホイッグ党員と狩猟者たち』のなかで次のようなことを見出していたことを思い起こしながら、彼自身まったく同じ行動をとるのである。「法は優越にある「水準」に留まることなくつねにも無残な水準にあったということ。それが生産様式と（所有権、土地保有権行使 agrarian practice の規定といった）生産諸関係それ自体の中で重なり合っており、また同時にロック Locke の哲学のなかに表されていること。それがイデオロギーを装い、かつらをつけガウンをはおって再び現れ、異質のカテゴリーの内部にぶっさらばうに押し入ってくる。それがタイバーン（死刑執行場）という劇場を教化しつつ、宗教とコティオンを踊ること。それは政治の武器であり、かつ政治はその武器の一つであること。それがそれ自体の自立的な論理に対する厳密性に左右されるアカデミ

ックなディシプリン〔学科=訓育〕であるということ。それが支配者と被支配者の両方の自己同定の定義づけに貢献すること。とりわけ、それが、そのなかで取って代わる法律についての意見が闘わされる階級闘争の舞台を提供すること⁶⁶。無論ある意味では、トムソンが仮定しているように、このどれもがアルチュセール Althusser 流のマルクスの読み方とまったく相容れないものである必要はない。アンダーソンは『資本論を読む』の形式上の約束事（プロトコル）が「丁度その、領域の複雑さを適確に説明している」ものであることを我々に想起させる⁶⁷。また別の意味では、それはオルマン Ollman（そしてハーヴェイ Harvey）が推賞するようなマルクスの関係論的見解を召還する。しかしトムソンが「経済的関係と非=経済的関係の解き難い混交」を認容するのは、相対主義に無理に登場させることを意図しているからではない⁶⁸。もし我々がこれよりさらに先に進まねばならず、結局、トムソンが文化と「非=文化」とかつて呼びたがっていたものの再統合を遂げねばならぬのであれば、彼は間違いなく、このことが構造化された再結合としてあるべきであることを受け容れる（そしてここでもまた彼がアルチュセールとそれほどかけ離れていないことは明らかである）。かくなる上は、再度決定の概念が取り上げられてしかるべきであろう。但し、これはあくまでも限界ある人間の主体的行為の能力と可能性という議論にまで我々をもう一度押しもどすという意味で、あるいは「隠れた決定という圧力から解放されたり、決定の範囲から逃れたりほしくないという意味」においてである⁶⁹。

トムソンははっきり『「限界を設ける」また「圧力を持続的にかける』という意味で』⁷⁰決定を定義しようとしてはいるものの、どんなかたちであれ、これを一般化して展開させることはなかった。その代わり、彼はレイモンド・ウィリアムズのまさに意を尽した豊かな議論に何度か言及する。そのなかでは二つの定義のいずれもが必要であることが強調されてる。すなわち

「『社会』とは、そういうわけで社会的な、また個人的な達成に限界をもうける単なる『殻』としてあるわけでは決してない。それはまた常に、政治的・経済的・文化的諸編成のなかに表出されているし、また『構成的』ということに重点をおけば、内面化されて『個人の意志』と化すような、非常に強力な圧力をもった構

成的なプロセスとして存在している。この種の全体に関する決定…限界と圧力の複雑で相互連関的なプロセス…は、社会的プロセス全体の、他にもないまさにそれ自体のなかに存在しているのであって、抽象化された『生産様式』のなかや、抽象化された『心理学』のなかにあるわけではない。統御するものとしてみられたり、あるいはつねに予測のために用いられるような自立的なカテゴリーの分離に基づく、決定論のどの様な抽象化も、特定のでありまたつねに関係的である決定子…受動的で客観化されているものと同様、積極的で意識的な歴史的経験でもある一現実の社会的プロセスであるような…の神話化に他ならない」⁹⁹。

トムスン自身の意図と、アルチュセールから真正距離たっていることを示すような経験的な特定性を強調するヒューマニストの物言いとは、これとどれ程びつたり一致しているかを「理解すること」は簡単である。しかしウィリアムズはアルチュセールをトムスン以上に厳密に取り扱っており、またアルチュセール派の…全くもってマルクス主義的な…問題構制の中心的な（「決定的な」）概念のひとつであり、彼の定義では、「そのなかにあって、見かけ上自立的な生産様式の稼動が可能となるために必要不可欠な物的生産である」これらの営為の全体として定義される生産諸力の考察を続けているのである。ウィリアムズの議論の要点は、これらがひとり経済的秩序にのみ限定されるものではないということにある。「資本制市場を維持する社会的・政治的秩序は、それを創り出した社会的・政治的闘争と同じように、必然的に、物的な生産としてあるのである」。そしてまた文化的秩序も同様である¹⁰⁰。ウィリアムズの定式化を認めるならば、トムスンの業績上の主な欠点は、彼が経済的なものを放逐していることよりも（これが極めて重要なことであるとはいえ）、むしろどちらかということとした物的な審級 instances 全ての決定力を探求し損ねていることにあるだろう。『イングランド労働者階級の形成』について述べたアンダーソンの言は、紛れもなく、そして残念なことに、的を得ているのである。「最初から明言されている主体的行為と条件付けを等価とみる考え方（労働者階級は「形成されたのと同じかたちで自らを再生産してきた」という有名な言説）は、依然として仮説に留まっているのであり、これが形成過程の両側面について適切な証拠を並べ上げながら検証されることなど決してない。彼らが力 power を秘めてい

たにもかかわらず、この本の第二部に刻み込まれた、彼らに対する大規模な軽蔑の視線と疎外化に関する記述は、イングランド労働者階級成立の客観的決定因子についての考察というにはほど遠いものである。トムスンが同書の第二部冒頭で読者に思い起させようとしているもの、すなわち彼が研究の対象として掲げているものは、その構造の変質ではなく、むしろこうした「過酷な歳月」を生きてきた人々の主観的な経験のなかに蓄積された沈黙物である。その成果は、客観的・主観的決定の織り成す複雑きわまりない多面体の集積、これを階級内部でその主観性へと向けられた、受難と抵抗の間に繰り返される単純な弁証法的運動へと解体していくことである。」¹⁰¹。

これらの沈黙物と主観性は無論、文化的な記述に限定されるものではなく、既に示したように、経済的・政治的な記述においても示すことが出来る。しかし、きわめて重要であるがゆえに認識しなければならないのは、こうした表示法のすべてが、ギデンズに従えば、構造的領域として我々が考え得るものと結びついているということであり、またそれらの諸効果のヒエラルヒーと決定を確定する何らかの手段がいまだに要請されているということである¹⁰²。

トムスンが、主だった意味ありげな言葉以外にこれを規定し得ていないのは、戦略上重要なことであり、別のところでは強調したはずの主体的行為と構造の地位を同格とみる考え方は、彼の問題構制の二つの中心軸が交錯するところで暗黙のうちに否定されてしまうのである。古典的マルクス主義において、決定概念は経済によって保証されていた。その後の再構築の試みは、粗暴な経済決定論から距離をとろうとするものであったが、にもかかわらず、その多くは¹⁰³、経済の有効性のための余地をもうけたのであった。その構造的因果性の概念を通して見るアルチュセールの場合、経済的・政治的ないしはイデオロギー的諸水準の「支配=権勢」は経済によって決定されるのである¹⁰⁴が、トムスンは、経済（決定）主義を構造主義と混ぜ合わせてしまう。そのため、唯物論は経済のまわりで閉ざされてしまっているわけではない（とアルチュセールもきっと認めるだろう）と論じながら、彼はただちに反対側の陣営へと移動してしまう。そしてこれもまた「マルクスは一切の構造主義的契機を破壊する de-gutting という形態」を、すなわち実質上の文化主義的主意主義の形態をとるものである¹⁰⁵。これは確かにどこかし

ら単純化した物言いである。なぜなら『イングランド労働者階級の形成』および『ホイッグ党員と狩猟者たち』には、経済的かつ文化的でさえもある決定の諸要素（たんに要素であるにすぎないが）が存在しているからである。しかし、これらはこっそりと覆い隠され、沈潜し、そして滅多に認識されることのないままでいる。それゆえにこそ、思うに、これら一対の同定作業の存在が概ね立証され得るのである⁷⁶。さてトムソンは紛れもなく知的信仰主義を認めていない。そのため、この戦略がオーソドックスなマルクス主義からの離反を示すものである限り、さしたる問題はない。但し、経済という古典的な柱を打ち倒して彼が行なった「文化」の復興は、同時に社会構造に対する主体的行為の促進でもあるがゆえに、本質的に不安定なものとならざるを得ないという部分は除外しなければならない。これに反して、マルクス主義の実践的な力は、まさに「決定論と主意主義の矛盾に満ちた組み合わせと、資本主義の法則の強調と、彼ら自身の自由な実践を通じたこれら法則への隸属からの人間の解放闘争」に由来しているのである⁷⁷。こういっただからといって、経済的地位が疑いのないものであるとか、決定の問題は理論的な用語でも経験的な用語でも簡単に回答が得られるものだといったことをほのめかすつもりはまったくない。別様と考えてみるが、トムソンの行った同定自体が評価に値するというところこそ論じられるべきだといいたいのである。

そして実際、こうした融合のなかで、事実上全てのヒューマニスティックな地理学がその内部に構築される構造 architecture はもたらされるのである。ここでは一つの事例しか示すことは出来ないが、全体の構想を示唆するには十分なものである。レイは、自らが担当した章の中で、ハーヴェイが『社会的公正と都市』においてはっきりと打ち出した「リベラルな」ものから「社会主義的な」定式化への移行が、事実上「パーク Park からエンゲルス Engels への、文化的な視角から経済的な視角への」移行であること、また結局のところ、それが「還元主義の世界」と「決定論」を召喚してしまうものであることをほのめかしている。本のカバーに描かれたエッシャーの絵の象徴的な意味合いは、移行の徴候といったところであろう。これは即ち「外に立って角度を変えながら自分の位置を調整し直しているエンジニア」の視角 perspective である。「この人物は自身の実体から永遠に切り離されたまま、そ

れを眺め、それを客体化し、それをモデル化するが、決してその実在に参与することもなければ、その対象からの視角を想定することも決してない」。このイメージはトムソンのものと著しく類似しており、その否定表現にいたってはまったく同じである。これは即ち、瞬く間に「学科に定着している通説」を超越し、人間の主体的行為の創造的次元のためにスペースを確保していくような文化的なものへと向う抵抗運動である⁷⁸。もしヒューマニストの言葉によって経済地理学を再構築しようとするウォーレスの威勢のいい…また言ってみれば、単独の…試みがなかったとしたら⁷⁹、ヒューマニストの企図は硬直した文化主義によって限界づけられているという結論を避けることは難しいだろう。

しかし、これは文化地理学の歓迎すべき復権である以上の、さらにトムソンの業績についてホールが称賛する、経済主義への意味深い訂正以上の問題である⁸⁰。なぜなら、その実践的な生活の限定—拘束性の認識がそれ自体、はっきりと文化主義的な固い込みによって閉ざされているからである。ジェイムソン Jameson のいう「言語という牢獄」にともなう偏見と、その「空間」と「場所」という二つの構築物間の感情的な通路の発掘は、観念論ではないにしても、少なくとも唯心論 mentalism を表に出してしまうものなのである。しかしまた、正しくヒューマンな地理学が、現在のヒューマニストによる批判から現われるとしても、それが認知的なものや文化的なもの以外に、構造の有効性を認識しなければならないことは明らかである。別の形態（ないしは水準）の決定についても本格的に取り扱まなければならない。さもなければ、ヒューマニズムは実際不可避的に、私が本稿の冒頭で言及したような静観と裝飾物でしかないと言宣告されることになるだろう。我々自身の人文主義的伝統にとって重要な二つの概念である「自然」と「空間」を想起すれば、そのどちらも、明らかにまた等しく、文化の構造と同様、経済と政治の構造にもつながっているものであり、それらの接合についての適切な説明無くしては…諸概念の単一の非—還元的な体系のなかでそれらを具現化させる何らかの手段無くしては…、真に効力を有する主体的行為に関する領域は、厳しく限定せられるであろうし、ヒューマニスト的なプロジェクトの実践的な意図は救いがたいほど妥協に満ちたものとならざるを得なくなるだろう。

おわりに

幾人かの論者にとってはすでにその名誉を損なうようなものになっていよう。ヒューマンイズムは「科学との闘いに……始まる前から負けている闘い」のせむか、さもなくば支配権の縮小を受け入れねばならない」。なぜなら「客観的な社会的諸力」を認識し得ず、それゆゑ抵抗することもできずにいるからである。一層危険なのは、それが、社会から個人を抜き取ってしまうだけでなく「実存手段の生産と再生産」からも社会意識を抜き取ってしまう「『意志』や『精神』といった概念に秘められた観念論」にどしがたく浸されているということなのである⁸¹。このすさまじいレトリックによって、その浴びせ先がうすつべらな戯画にすぎぬことがあらかた露呈されてしまった。私が本稿で示そうとしたように、科学的手法と必然的に相容れないようなヒューマンイズムのプロジェクトはない。科学の地位にある特定の方法に帰してしまうようなやり方では納得いかないかもしれないが、このような手法が社会的交渉の契機として認識されている……つまりそれらの本質的な主観性を認め得るように規定されている……限り、厳格で誠実な知的探究の約束事は、原則としては、維持され得るのである。そして社会生活の間主観的構成を強調することで、ヒューマンイズムは、それが個人と社会との間の周期的で再帰的な関係が社会生活と社会構造の生産と再生産のなかに根本的に内包されているということを原則的に認める能力のあることを証明した。

しかしながらこうした対応はいずれも、批判者の異議の迫力に完全に抗しきれはしない。そのどちらも、ぎこちなく、この試験の範囲を超えて、別の方向、すなわち同様に本質的な議論の方向を指し示している。その議論とは、決定概念をめぐるものである。

私はこの議論の概略の素描さえ為し得ない、が、若干の手短なコメントは必要であろう。その解決は、「科学」の社会的な構築と社会の構造化の両方がききの唯物論に依拠していることを示し得るような方法を、考えに考えた上でどう認識するかという点にかかっていることを指摘しておこう。社会形態とその「基質的matrix」な生産様式とも関係した科学のとりわけ理論的営為の位置は、現代のマルクス主義にとって極めて重要な問題としてある。私は、ヒューマンイズムが、見

覚えのあるような科学的方法の手続きに歩み寄りを見せなかったわけではないと論じながら、その本質的な主観性を認識している限りは、厳合する方法論に社会的裁定を下すような対処策 protocols を提示することは出来ない。科学を特権化された自立的な営為とし、この種のあらゆる主張を否定するハーバーマスの思想と、知識一構成の利害関係の理論に関する彼の梗概的なプログラムについては別のところで論じており、その討論を今繰り返す必要はあるまい。しかし、現在の文脈で重要なことは、これらの対抗＝主張が、明らかに異論の余地があるとはいえ、如何に…マルクス主義とヒューマンイズムの双方が想定するように…(科学についての異なった概念を含めた)異なった知の形態が、限定された社会的実践によって構成されるものかを示しているということである⁸²。そうすることで、それらははっきりと「再生産されるに違いない社会生活に応じた実践的諸問題」とコックス Cox が呼ぶものへ注意を向けるのである⁸³。最も一般的な言葉において、まさに人間の歴史性の核心で脈打つ人間と自然の間の弁証法的な関係からこれらが流れ出ていることを主張しておきたい。さらにまた重要なことは、この関係こそが構造化に基本的な定理をもたらす当のものだということである。というのも、マルクスによれば、「労働は、まず第一に、人間と自然の間の一過程である。すなわち、人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し、規制し調整する過程である。人間は自然素材そのものに対して一つの自然力として相対する。彼は自然素材を、人間自身の生活のために使用しうる形態において獲得するために、彼の身体を持っている自然力(中略)を機動させる。この運動により、彼の外にある自然に働きかけ、これを変化させるとともに、同時に彼は彼自身の自然を変化させるのである…」⁸⁴。

この二重の運動ないしは「矛盾の統一」を、ヴィダール派のあらゆる先駆的な喚起と同様、ギデンズは、それが必然的に伴う(ヴィダール派の地理学においてはさっさと片づけられてしまった)仲介＝仲裁を引き出すために、巧みに捉えた。即ち、社会によって、あるいは、構造の二重性のなかで、社会的再生産が横行されるという点から見れば、諸制度によって、人間と自然の関係は「常に仲介されているのである。人間存在の実在の矛盾は、このようにして、現実にはその単なる媒介でしかない⁸⁵構造的な矛盾へと変質するように

なるのである」。この策略によって、人間の主体的行為と社会構造の関係、および人間と自然の関係は、同時に固有の問題構制の中へと持ち込まれる。それはあたかも切り離しては解の得られない連立方程式のようである⁸⁶。

この種の意見は明らかに、ただ単にヒューマニズムとマルクス主義の間にもろくも壊れそうな橋をかけるがごときことでしかない。その橋は強化されなければならない。近代のヒューマニズムは、社会生活の物質性に関する議論を十分に展開させてきたわけではない。その結果、それは、社会的意味を解明し社会的行為を解説するその試みにもきつと影響を与えている「客観的な社会的諸力」というものを理解する際に、厳しい困難に出くわすことになるのである。またマルクス自身は人間の主体的行為のもつ力とその可能性を決して忘れることはなかったものの、より構造主義的なマルクス主義は、それについての堅固な概念を持ち併せていないがために、志向性と意識の理解において、その社会構造の再生産と変形に関する説明をも危くさせるような、同様に侮りがたい困難に直面することになるのである。少なくとも、そういうわけで、幾人かの論者が恐れるように⁸⁷、決定論者と可能論者の論争を復活させるのではなく、むしろ生活様式と生産様式の双方の根っこにある実践的生活の物質的な基礎を解明するようこの議論を再構築して、オリジナルなヴィダール学派の見通しに戻ってみることは、おそらくとても実りのあることであろうと思うのである。

注と文献

- Ley, D. and Samuels, M. (1978) *Humanistic geography: prospects and problems* (London and Chicago).
- Bowen, E. (1980) Review of Humanistic geography, *Scott. geogr. Mag.* 96, p.63.
- Ley, D. (1980) *Geography without man: a humanistic critique*, Univ. of Oxford Sch. Geogr. Res. Pap. 24.
- Buttimer, A. (1978) Charism and context: the challenge of la géographie humaine, (前掲 1)所収 pp.58-76.
- Tuan, Yi-Fu (1976) Humanistic geography, *A.A.A.G.* 66, pp.286-76.
- Ley, D. and Samuels, M. (1978) Introduction: contexts of modern humanism in geography, (前掲 1)所収 p.1.
- 前掲 6), p.2.
- Thrift, N. (1978) Landscape and Literature, *Environ. Plann.* 10, pp.347-9; Steiner, G. (1978) *On difficulty and other essays* (Oxford) p.2 を見よ。
- 例えば Seamon, D. (1979) *A geography of the lifeworld* (London); Wood, D. (1978) *Introducing the cartography of reality*, (前掲 1)所収 pp.207-19 を見よ。
- 例えば Tuan, Yi-Fu (1978) *Literature and geography: implications for geographical research*, (前掲 1)所収 pp.194-206 における警告的な意見を見よ。
- 前掲 4)および Berdoulay, V. (1978) *The Vidal-Durkheim debate*, (前掲 1)所収 pp.77-90 を見よ。
- Berdoulay, V. (1976) French positivism as a form of neo-Kantian philosophy, *Proc. Ass. Am. Geogr.* 8, pp.176-9.
- Vidal de la Blache, P. (1903) *La géographie humaine: ses rapports avec la géographie de la vie*, *Rev. de synth. hist.* 7, pp.219-40.
- Buttimer, A. (前掲 4), Vidal de la Blache, P. (1911) *Les genres de vie dans la géographie humaine*, *Ann. de Geogr.* 112, 289-304.
- Berdoulay, V. (前掲 11) p.87.
- Febvre, L. (1932) *A geographical introduction to history* (London) (フェーブル L. 『大地と人類の進化』岩波書店) p.367.
- Lukerman, F. (1965) *The Calcul des Probabilités and École Française de Géographie*, *Can. Geogr.* 9, 128-37.
- これについて私は Gregory, D. (1981) *Social theory and spatial structure* (London) で詳しく論じた。
- Tuan, Yi-Fu (1971) *Geography, phenomenology and human nature*, *Can. Geogr.* 15, pp.181-92; Olsson, G. (1978) *Of ambiguity: or far cries from a memorializing manafesa*, (前掲 1)所収 pp.109-120.
- Samuels, M. (1978) *Existentialism and human geography* (前掲 1)所収, p.27, p.29.
- Tuan, Yi-Fu (1975) *Space and place: humanistic perspective*, *Progress in Geography* 6, pp.211-52.
- Buttimer, A. (1976) *Grasping the dynamism of the lifeworld*, *A.A.A.G.* 66, pp.277-92. (邦訳、千田編『地区のかたに』所収)
- Entrikin, J. N. (1976) *Contemporary humanism in geography*, *A.A.A.G.* pp.615-32.
- Entrikin, J. N. (1977) *Geography's spatial perspective and the philosophy of Ernst Cassirer*, *Can. Geogr.* 21, pp.209-22.
- Sack, R. (1980) *Conceptions of space in social thought: a geographical perspective* (London), pp. 26-30.
- 前掲 25) p.23.
- 例えば, Tuan, Yi-Fu (1974) *Topophilia: a study of environmental perception, attitudes and values* (New Jersey) (小野有玉・阿部一訳(1992)『トポフィリア』せりか書房); 同(1977) *Space and place: the perspective of experience* (London) (山本浩訳(1988)『空間の経験』筑摩書房)

- を見よ。
- 28 Sack (1980) (前掲25) p.198.
- 29 Buttimer (1978) (前掲11) p.61.
- 30 Gregory, D. (1978) *Ideology, science and human geography* (London) p.172.
- 31 Thompson, E. P. (1978) *The poverty of theory and other essays* (London); Harris, C. (1978) *The historical mind and the practice of geography* (前掲1)所収 p.134.
- 32 以下の議論の一部は当初、Gregory, D. (1979) The "historical mind" and "historical logic": problems of human agency in historical geography 1として、I.G.U.のシンポジウム「歴史地理学の方法」(Emmanuel college, Cambridge, England)において発表されたものである。
- 33 Harris (1978) (前掲31) pp.125,136; Thompson (1978)(前掲31) p.230.
- 34 Gregory, D. (1978) The discourse of past: phenomenology structuralism and historical geography, *J. hist. Geogr.* 4, pp.161-73. トムソンはこの解釈学的方法を強調する「対話」の必要性を不断に説いている。
- 35 Harris (1978) (前掲31) p.129.
- 36 Thompson (1978) (前掲31) p.234.
- 37 Thompson (1978) (前掲31) p.199; Harris (1978) (前掲31) p.125.
- 38 Thompson (1978) (前掲31) p.230.
- 39 Thompson (1978) (前掲31) p.359; Harris (1978) (前掲31) p.134.
- 40 Gregory, D.(1978) (前掲34) pp.55-62 を見よ。
- 41 Thompson (1978) (前掲31) p.81.
- 42 Olsson, G. (1978) (前掲19) p.114.
- 43 Tuan, Yi-Fu (1978)
- 44 Steiner, G.(1975) *After Babel: aspects of language and translation* (London and New York) p.218.
- 45 Thompson, E. P. (1963) *The making of the English working class* (London).
- 46 トムソンの理論的 itinerary の指摘については Johnson, R. (1978) Edward Thompson, Eugene Genovese and socialist-humanist history, *Hist Workshop J.* 6, pp.79-100 を見よ。
- 47 Thompson (1978) (前掲19) p.93.
- 48 Thompson (1978) (前掲19) p.344.
- 49 Hall, F. (1974) The new geography: games of space chess, *New Society* 28, pp.693-4; Gregory, D.(1978) Social change and spatial structures, in Carlstein, T., Parkes, D. and Thrift, N. (eds) *Timing space and spacing time: Vol.1. Making sense of time* (London) pp.38-46.
- 50 Anderson, P. (1980) *Arguments within English Marxism* (London) pp.56-7.
- 51 Anderson (1980) (前掲50) p.56.
- 52 Giddens, A. (1979) *Central problems in social theory* action, structure and contradiction in social analysis (London) p.69. (友枝俊雄・今田高俊・森重 雄訳(1989)『社会理論の最新視』ハーベスト社)
- 53 Bourdieu, P. (1977) *Outline of a theory of practice* (Cambridge) p.83. (参考: 今村仁司他訳(1988・1990)『実践感覚 1・2』みすず書房)
- 54 Giddens (1979)(前掲52); Gregory, D.(1980) The ideology of control: systems theory and geography, *Tijdschr. econ. soc. Geogr.* 71, p.327-42.
- 55 Ley and Samuels (1978) (前掲1) p.12.
- 56 Ley, D. (1978) Social geography and social action (前掲1) 所収 p.52 より引用; Duncan, J. (1978) The social construction of unreality: an interactionist approach to the tourist's cognition of environment (前掲1)所収 p.271.
- 57 表1は Bhaskar, R.(1979) *The possibility of naturalism: a philosophical critique of the contemporary human sciences* (Brighton) に負っている。
- 58 Sahlins, M.(1976) *Culture and practical reason* (Chicago and London)pp.55, viii. (山内潤訳(1987)『人類学と文化記号論: 文化と実践理性』法政大学出版局)
- 59 Johnson (1978) (前掲46) および Hist. Workshop J.におけるその後の議論を参照のこと。
- 60 Thompson (1978) (前掲31) pp.119-20.
- 61 Thompson (1978) (前掲31) p.344.
- 62 Thompson (1978) (前掲31) pp.353,356.
- 63 Wallace, I. (1978) Towards a humanized conception of economic geography (前掲1)所収 pp.91-108.
- 64 Thompson (1978) (前掲31) p.288.
- 65 Anderson, P. (1980) (前掲50) p.70.
- 66 Ollman, B. (1971) *Alienation: Marx's conception of man in capitalist society* (Cambridge); Thompson (1978) (前掲31) p.82.
- 67 Thompson (1978) (前掲31) p.353.
- 68 Thompson (1978) (前掲31) p.351.
- 69 Williams, R. (1978) *Marxism and literature* (Oxford) p.87.
- 70 前掲69) p.93.
- 71 Anderson (1980) (前掲50) p.39.
- 72 Laidler, D.(1979) Problems in accounting for the individual in Marxist-rationalist discourse, *Br. J. Social.* 30, pp.149-63.
- 73 例外は Cutler, A., Hindess, B., Hirst, P., Husain, A. (1977) *Marx's Capital and capitalism today* (London).岡崎次郎・塩谷安夫・時永淑訳(1988)『資本論と現代資本主義』法政大学出版局)
- 74 Althusser, L. and Balibar, E. (1970) *Reading Capital* (London) (権幸・神戸仁彦訳(1974)『資本論を読む』合同出版)
- 75 Stedman Jones, G. (1979) History and theory, *Hist. Workshop J.* 8, p.202; 討論におけるステッドマン・ジョーンズの警句はトムソン自身よりもトムソンの支持者へと向

けられていることに注意しておきたい。

- 76 私は Gregory, D. (1981) *Regional transformation and industrial revolution: a geography of the Yorkshire walen industry* (London) で、詳しく議論している。
- 77 Gouldner, A. (1980) *The two Marxisms: contradictions and anomalies in the development of theory* (London) p.224.
- 78 Ley (1978) (前掲1)所収) p.46-7.
- 79 Wallace (1978) (前掲63) .
- 80 Hall, S. (1980) Theory and experience, *New Statesman*, 30 May.
- 81 Smith, N. (1979) Geography, science and post-positivist modes of explanation, *Progr. hum. Geogr.* 3, pp.356-83; Eliot Hurst, M.E.(1980) Geography, social science and society: towards a de-definition, *Aust. Geogr. Stud.* 18, pp.3-21.
- 82 Gregory, D. (1978) (前掲30) pp.68-70,157-60.
- 83 Cox, K.(1980) Bourgeois thought and the behavioural geography debate (複写印刷物).
- 84 Marx, K. (1976) *Capital: a critique of political economy* Vol.1 (Harmondsworth) p.283. (向坂逸郎訳(1969)『資本論(二)』岩波書店) 一部改変した。
- 85 Giddens (1979) (前掲52) p.161.
- 86 Gregory (1980) (前掲54) .
- 87 Cox, K. (1980) (前掲83) ; Smith, N.(1979) (前掲81) .